

# 棚田学会通信

## 第57号 目次

特集 棚田と教育 (I) . . . . .	1
2018年棚田学会発表会参加記 . . . . .	6
日本の棚田百選紹介 . . . . .	7
事務局ニュース . . . . .	8



## 特集 棚田と教育 (I)



写真上段左「田植えの様子」(中野方小学校)  
 上段右「稲刈りの様子」(八幡小学校)  
 中央「藍葉を使った絞り染め」(三輪田学園中学校)  
 下段「田植え」(美作高等学校)

棚田への興味・関心を高めるためには、幼少期からの動機付けが必要である。そのため、今号からの3号は「棚田と教育」をテーマに、様々な学校での取り組みを紹介していく。初回の今号では、とくに小中高での活動を紹介する  
 (棚田学会編集委員会)

## ふるさとの誇り 坂折棚田に学ぶ ～棚田での学習について～

岐阜県恵那市立中野方小学校 教頭 大平 和子

本校は、恵那市の北部に位置し、児童数 80 名のへき地小規模校です。四方を笠置山や権現山といった山々に囲まれ、地域の中央を中野方川が流れる豊かな自然環境に恵まれています。

本地区には「日本の棚田百選」にも認定された石積みの美しい『坂折棚田』が扇状に広がっています。この棚田は約 400 年前に名古屋城の石積みにも携わった「黒鋤（くろくわ）」と呼ばれる石職人の集団によって作られたといわれています。

本校のふるさと学習では「中野方を誇りに思い、中野方で生きる子」の育成を目指して、各学年の活動に取り組んでいます。棚田での米づくりは、5、6 年生で行っています。棚田に関わる 1 年間を紹介します。

### 《5 月》

5 月には、棚田保存会の方々のご協力を得て、田植えを行います。水を張った田の中に入り、2～3 本の苗を取り分けながら、手で丁寧に植えていきます（写真表紙上段左）。また、棚田の米が美味しい理由についても、寒暖の差があり、坂折川上流部からのきれいな水が豊富にあること、米づくりに多くの手間をかけていること、そして、石積みの修理等も丁寧にしていることを教えていただきます。

この後、5 年生は、棚田へ水を供給する坂折川の水源となる森を探索します。児童たちは、水源を探す中で希少な植物が生育する湿地と出会い、この湿地を守っているのは、管理された森であることを学びます。

### 《6 月》



写真 1 田の神様灯祭りの様子

6 月の初旬に地域の行事として、無事に田植えが終わったことを感謝する「田の神様灯祭り」(写真 1)が開かれます。日が暮れるにしたがって灯りに縁取られた棚田が幻想的な世界に誘います。児童たちも点灯式や提灯行列に参加しています。

また、下旬には草取りを行います。手で草取りをするだけではなく、昔、使っていた「八反ずり」という道具を使い、先人の知恵と苦勞を感じながら取り組みます。

### 《9 月》

9 月中旬～下旬頃、待ちに待った稲刈りを行います（写真 2）。児童たちは、豊かな実りを与えた自然へ感謝しつつ、稲を一株ずつ手で刈り取ります。その後、機械で脱穀をします。また、落ちた穂も大切に拾い集めます。



写真 2 稲刈りの様子

### 《10 月》

10 月下旬には、中野方小秋祭りが開かれます。これは、ふるさと学習でお世話になっているの方々や地域の方々をお招きして、今までの活動の中間報告会と感謝の会です。そこで、棚田米と三年生が育てた大豆から作った味噌を使って、ご飯と豚汁を味わいます。

こうした学習の中で、児童一人ひとりが今も大切に守っている方々の思いを知り、地域の一員として、ふるさとの誇りを受け継いでほしいと願っています。

## 八幡小学校における棚田の学習

長野県千曲市立八幡小学校 教諭 岡田 芳宜

信州姨捨の棚田は、千曲市の八幡小学校区内にあり、その景観を維持するために、千曲市と棚田の管理・運営を任されている「名月会」が中心となって

様々な活動が展開されている。しかしメンバーの高齢化や作業の大変さから、棚田での米作りについては「棚田貸します制度」というオーナー制を導入し、全国から米作り希望者を集めている。本校も地元ということで、毎年5年生が棚田の一区画を借り受け、米作りの学習を進めている。今年も5年生41名で田んぼ5枚（合計約175㎡）を借り受け、米作りの体験学習を行った。

この学習は、総合的な学習の時間（本校では「田毎の時間」という名前子どもたちの間に定着している）を利用して、子どもたちに米作りの大変さや作物を育て収穫する喜び、そして地域の方々との交流を通して多くの人々に支えられていることへの感謝の気持ちなどを学習するねらいがある。

### <棚田にかかわる年間の活動>

5月17日 棚田の見学

代掻きが終わった頃、棚田を初めて見学に行った。学校から歩いて20分ほどにある棚田だが、子どもたちはとてもワクワクしながら歩いている。現地に着くと名月会の方々が出迎えてくださり、1年間どのような活動を行うのかということや、名月会で棚田の景観を守っていること、その手伝いをオーナーのみなさんがしていることなどの説明をしていただいた。実際に棚田を訪れ、説明を聞いたり、田んぼの様子を目の前で見たりしたことで、子どもたちはいよいよ自分の手で米を育てるのだという期待感を持つことができた。

5月26日 田植え

名月会の方々に苗の植え方を教えていただきながら保護者の協力も得て、一つ一つ苗を植えていった。紐を頼りに一直線になるように植えたつもりが手作業のため、列が曲がっていたり間隔が不揃いだったりしている所も見られる（写真1）。



写真1 まっすぐ植えるのは難しいなあ

しかしそれも子どもたちが手作業でやる良さかもしれない。作業が終了し、改めて自分たちの手で植えた苗を見た子どもたちは、とても満足そうであった。

9月20日 稲刈り

名月会の方々に稲刈りの仕方を教えていただきながら、鎌を持ち、手作業で刈り取っていった（写真表紙上段右）。平日のため保護者の協力を得るのが難しかったが、それでも十数名の保護者が手伝いに来て下さり、1時間ほどで全ての稲を刈り取ることができた。刈り取った稲は、はぜ掛けにして2週間ほど天日干しにした。

10月1日 脱穀

はぜ掛けを行ってから約2週間後に脱穀を行った。当初は棚田に出かけていって行う予定だったが、台風の心配があったことから、急遽庁務員の先生がはぜ掛けごと学校に移動して下さり、学校の敷地内で行うことになった（写真2）。脱穀機も庁務員の先生のものをお借りすることができた。



写真2 学校での脱穀体験

心配されていた台風もそれほど大きな影響なく過ぎ去り、無事に脱穀を行うことができた。今年の収穫量は120kg、これを精米すると、およそ7割程度になり、約80kgの収穫となった。

12月7日 収穫祭

収穫祭は、本校では親子レクを兼ねての行事と位置づけて毎年行っている。保護者の協力をいただきながら収穫したもち米を使ってきなこ餅、あんこ餅、ごまの餅を作る。また、各自が持ち寄った野菜を入れた豚汁も保護者に作っていただく。

収穫祭当日は、名月会の方や日頃お世話になっている先生方に感謝の気持ちを示すために招待し、餅や豚汁を味わっていただく。名月会の方には、お世

話になったお礼として、メッセージカードや収穫したもち米をプレゼントする(写真3)。また、その年の学年の計画で、子どもたちが1年間を振り返っての発表を行う。今年は一入ひとりが考えた言葉をスクリーンに映し出した写真に合わせて発表した。保護者や職員の前で、緊張しながらの発表だったが、1年間の活動を振り返る写真を見ながらの発表を会場のみなさんに楽しんでいただくことができた。この収穫祭をもって、一年間の棚田の学習は完結する。毎年恒例となっている棚田の学習だが、年によって各学年の特色が表れた収穫祭となっており、子どもたちにとって大きな経験ができる場である。



写真3 収穫祭で名月会の方に感謝

#### ＜棚田の米作りを通しての成果と課題＞

今年1年間の活動にも見られるように、子どもたちにとってこの棚田での米作りは、自然との関わりはもちろんのこと、一年間通してお米を育てることの大変さや、地域の方々や学校の先生方、保護者の皆様など、多くの方々に支えられて自分たちの活動が成り立っていることを学ぶことのできる貴重な学習の場となっている。今まで、当たり前のようにお米を食べていた子どもたちが、お米ができるまでにどれくらいの時間と苦勞がかけられているのかということにも目を向けることができるのである。また収穫祭の場では、自分たちがお米を収穫するために、いろいろな場面で支えて下さった皆様への感謝の気持ちを表し、さらに棚田を通して地域の方とふれあうことのできる八幡のよさを実感できる。この棚田の学習には、教室だけではなかなか学び得ない大切な内容がたくさん詰まっているのである。

しかし一方で、学校では英語や道徳、プログラミング学習の導入などで日期的にも多忙となり、往復で40分ほどかかる棚田へ出かける時間の確保がますます難しくなりそうである。オーナー制度の一斉作業の日程と学校行事の日程が合わないことも予想される。八幡小学校も子どもの人数が年々減少して

おり、以前より借り受ける田の面積を減らしたり、作業を簡略化したりするなど、子どもたちの体験活動を縮小せざるを得なくなってきている。また、棚田を管理する名月会の方々の高齢化と後継者不足による棚田の存続そのものにも課題があるといえる。

これからも、姨捨の棚田という美しい景観と、その棚田を学区内に持つ本校の学習を存続していくためには、双方にさまざまな課題がある。しかし、1年間子どもたちとともに棚田の米づくりの活動をしてみて、このような恵まれた学習環境はなかなかなく、子どもたちの中に地域の誇りや地元愛を育てる上でも大きな意味があるので、できるだけ存続できたら、という思いを改めて持つことができた。

#### 中学地理のフィールドワークとしての 棚田見学会

東京都私立三輪田学園中学校 校長 吉田 珠美

本校で地理のフィールドワークとして千葉県鴨川市の大山千枚田に生徒を連れて行くようになったのは、今から14年程前のことでした。本校は千代田区にある明治期に設立された私立の女子中高です。

生徒は東京都内又は近郊から通学してきますが、都心にある学校ですし、小学校の後半は塾通いで過ごしてしまった子が多く、土に触れる経験や泥だらけになって遊んだ経験などない子がほとんどです。それでも試験を経て入学してくるので、米の生産高の高い県など統計的なことは知っている。知識知と実践知の乖離が非常に大きいと感じていました。地理の授業で日本の農業の実情や問題点をあげて、アクティブ・ラーニングをしようとしても、実感として映像が浮かんでこないのが、課題解決どころではない状態です。

どうしたものかと考えている時に、中島峰広先生にお会いして大山千枚田のお話を伺いました。中島先生は大学時代の恩師です。東京から2時間のところに素晴らしい棚田があるとお聞きしたので、これを地理のフィールドワークとして活かさないかと考え、改めてご相談しました。高齢化の進む山間地の狭小稲田を都会に住む方々がオーナーとなり、地元の農家の方々と一緒に運営していると伺い、これからの農業の一つのモデルかもしれないと思いました。早速同僚の社会科教員と一緒に下見に行き、大山千枚田フィールドワークが始まりました(写真1)。



写真1 大山千枚田でのフィールドワークの様子

初年度、事前学習には中島先生が本校にお越しください、生徒たちに地図や資料を示し、耕作者の高齢化、狭小で高低差があるため機械化しにくい等、棚田には日本の農業の抱える問題が凝縮していると話してくださいました。その時頂いた資料は、今でも棚田見学会の事前学習資料として使っています。

それ以来、毎年夏休みに中学1年生の希望者を連れて大山千枚田に伺っています。最初はフィールドワークだからと気負って、課題満載のワークシートを作ったりもしましたが、生徒たちは夏の稲田を吹き抜ける爽やかな風に触れるだけでご機嫌なのだとすぐに分かりました。それからはワークシートを完成させるより、棚田でしかできない体験をしてもらおうと考え、畑の藍葉の刈り取りや綿の木に添え木をするなどの農作業のお手伝いと、藍葉を使った絞り染め(写真表紙中央)、稲藁での亀作り(写真2)などを棚田倶楽部の方々からご指導して頂きながら楽しんでいます。



写真2 稲藁での亀作り

地元の方々との交流もでき、開放的な空間での作業という経験が、教室では決して学ぶことができない実地体験になっていると感じています。都会の子どもたちは手の平を使って物を作る経験がほとんど

なく、藁を扱う体験すら貴重です。女子は実習や体験を伴う学習の定着率が高いといわれています。一日体験にすぎませんが、この見学会は参加生徒にとって大きな学習の動機付けになっています。現在は夏休みに限定されていますが、今後田植えや稲刈りのシーズンなどに、見学のチャンスを増やしていくと良いと考えています。

美作高校英語ユネスコ部における  
棚田での取り組みについて

～棚田をキャンパスにした人間教育～

岡山県美作高等学校 教諭 本郷 統章

岡山県の県北に位置する津山市にある美作高校は、ユネスコスクールに認定されており、英語ユネスコ部を中心に地域に出向いて地域社会に貢献する活動を展開している。

中でも、2013年に日本ユネスコ協会連盟より「第5回プロジェクト未来遺産」に登録された美作市の英田上山棚田での棚田再生活動はユネスコ部の中心的な活動になっていった。

限界集落で、荒廃した棚田の再生を行う「英田上山棚田団」のサポート活動として、定期的に棚田を訪れ、除草や田植え稲刈りを手伝う活動を行った。当初、参加する生徒のほとんどが女子生徒で、農作業の経験はなく、棚田での活動が農業初体験であった。現地で、上山棚田の歴史や棚田再生の研修を受け、棚田を再生することにどのような意味があるのか、地域再生についての必要性などの知識を身につけてから実際に棚田での活動に取り掛かった。

春には、裸足で田んぼに入り、手植えで田植え(写真表紙下段)。夏には草取りや周辺の整備、秋には手刈りで稲刈りをし、1年を通して棚田での活動を行ってきた(写真1)。



写真1 石垣の清掃

最初は、田んぼに入ることに消極的だった生徒たちが、徐々に自分から作業に取り組むようになっていった。この背景には、「農業の楽しさ」「必要性」などを上山棚田の方々から学びながら活動できたことや、地域の大人との関わりの中で自分たちの活動に自信が持てるようになったからではないかと思う。その成長や、笑顔で活動する生徒たちを側で見て、普通の教室とは異なった「棚田＝自然」という環境が生徒の心の成長につながっていることを実感した。この活動の趣旨は棚田再生・地域協力であるが、棚田の整備や農作業を体験することだけではなく、自然との関り、地域の人々との関りから様々な感覚を学んでほしいと考えていた。

上山棚田での活動はユネスコ部の活動だけでなく、校内にも広がりを見せ、他の生徒達も参加するようになった。上山には再生できていない棚田も多く、木や草に覆われた田地を復元させることを目指して男子生徒の多いライセンスコースの生徒が参加するようになった。木の伐採や草刈り（写真2）などの荒れ地の復興作業を行った。



写真2 ライセンスコースの作業（草刈り）



写真3 ライセンスコースの作業（チェーンソー）

普段から工具を扱って作業をする生徒達なので、棚田再生の力仕事を担当。上山棚田団の指導のもとチェーンソーや草刈り機の使用の指導を受け、次々

と木を切り出したり（写真3）、運搬の作業や焼却を行った。自らの力で荒れ地を切り開く、自分たちの力が活かされているということに自信を持つ生徒も多く出てくるようになった。

私達が英田上山棚田で活動をするようになって、過疎化が進む岡山県北地域において、いかに若者の力が必要とされているか、若者が地域を明るくしているのかがわかるようになった。地域再生・地域の活性化というのは、労働力としての若者の存在だけでなく、地域の人々を笑顔にさせる存在としての価値が必要なのではないかと感じた。かつて栄えていた8000枚もの棚田を再生させるということは地道な努力の積み重ねが必要であると思う。その活動に取り組む英田上山棚田団を少しでも高校生がサポートし、さらにそこから人間性や棚田の田園風景が生み出す地域性を身につけてもらいたい。

生徒達がこの活動に参加することで得たものは、限界集落で耕作放棄地であっても、協力し合い関わり続けることで復興できること。また、そこに笑顔があり1回だけの参加ではなく、「また来たい、また作業をしたい」という気持ちを持てるようになったことである。参加した生徒はみな活き活きとした表情で作業に取り組み、荒れ地がきれいになっていく様子を実感しながら取り組むことができた。今後も、多くの生徒に棚田という自然のキャンパスでの活動に関わってもらい、地域の遺産を守り育てる心を持った大人になっていってほしい。

## 2018年棚田学会発表会参加記

九州大学芸術工学府 菊地 稚奈

2018年12月15日に立正大学品川キャンパスで行われた発表会では、若い研究者たちにより4題の研究が発表された。

発表は、立正大学文学部社会学科4年の丸山未来さん、塩川梨央さんによる「オーナー制度と担い手構築ー姨捨棚田オーナーへのアンケート調査報告ー」、愛知県立佐屋高等学校 生物生産科3年の白田世菜さん、大宮涼真さん、同教頭の亀嶋浩之先生による「アヒル農法による生物多様性の保全とアヒル農法米による6次産業化の推進！」、静岡大学棚田研究会の栗田真菜さん、松島千尋さんによる「なぜ大学生が棚田に向かうのかーつながりの持つ価値を見直すー」、日本大学生物資源科学部生命農学科4年有田美紅さん、同教授大澤啓志先生による「中山間地域における地域資源の認識・活用の展開過程

「栃木県那珂川町小砂地区を事例に」であった。

立正大学社会学科ではこれまでも姥捨棚田における研究に多く取り組まれているが、今回は棚田オーナーへのアンケート調査によるものであった。興味深かったのは県外からの参加者の継続率が高く、またオーナーの高齢化も進んでいるという点、棚田保全の意識の高い点であった。県外参加者は、きっかけとしてはレジャーであったとしても、そのまま生活の一部となり、長く継続しているという印象を受けた。近場のレジャーとして参加しやすい県内の参加者は、試しに経験すると、他のレジャーを求めるのではないだろうか。これからのオーナー制度は、レジャーのメニューの一つとしてだけでなく、ライフスタイルの中に組み込み、また社会性へのメッセージを込める必要もあると感じた。

2 題目では、長年の研究における試行錯誤、特にアヒル利用上の課題をコールドックへ転換することで克服したことや、6次産業化の取り組みとしてのおにぎり販売や化粧品開発など数多くの活動の展開について紹介された。棚田耕作に関わっている会員が多いためか、アイガモでなくアヒルを使うことによるメリットやデメリット、雑草やジャンボタニシの防除効果についてなど、現実に即した質問が多く集まり活発な議論となった。

静岡大学「たなけん」の活動については、以前にも話題とされたことがあったが、時を経ることで様々な広がりを見せ、活動が安定することでサークル員が自らを俯瞰し、活動が洗練されている印象を受けた。その中でも「つながり」を大事にし、楽しく活動している様子が伝わってくる発表であった。

4 題目は栃木県那珂川町小砂地区においてこれまで実施されてきた地域活動の展開プロセスの紹介に加えて、地域資源を結ぶフットパス・マップについて提案を行うものであった。「日本で最も美しい村連合」への加盟に着目し、そのことが地域活動に広がり誇りを与えたという考察にとどまらず、過去からのものに加え現在育ってきている地域資源を生かし、それらを回遊するルートとアクティビティを提案したことは印象的だった。

総合討論においては、多くの議論がなされたほか、今後の棚田の耕作放棄の歯止めについての質問が投げかけられた。

発表者たちは、自らが関わってみるまでは棚田や農業のことについて知らなかったものの、関わってみるととても楽しいことに気づかされた、多くの人や小中学生にそれを伝えることで少しでも保全につなげたいといった意見が出され、それに関連してSNSやインスタ映えを利用するなど、若者ならではの

の提案もなされていた。

このように若く、またしっかりと自らの考えをもった棚田の研究者たちが育っていることがたいへん頼もしく、棚田の将来に対する展望が感じられる発表会であった。



## 日本の棚田百選紹介

### 宮城県丸森町「大張沢尻棚田」

宮城県丸森町農林課 農村整備班 石田 真士

丸森町は、仙台市から南へ約 50km、宮城県の最南端にあります。

大張沢尻棚田は、丸森町中心部から北西の阿武隈川渓谷沿いに位置し、本河川から約 1,400m にわたった急峻な沢に集落と水田や畑が連なる、きれいな原風景を保った典型的な中山間地域です。

地域農業は、湧水を利用した水稲と養蚕を組み合わせた複合農業が営々と展開されてきましたが、近年は養蚕にかわる作物として気象や地理的条件を生かした『あんば柿』の生産が行われ、特産品として定着してきました。

当棚田は、江戸時代から昭和 30 年代頃にかけて、この集落の人々が僅かな水田と原野を重機のない時代に『鍬』や『もっこ』といった道具と馬で現在の姿に整備しました。天水、湧水を利用するために設置した池をはじめ、各々の所有者は畜産農家との連携により、稲わらと堆肥の交換による有機農業を推進し、耕作を行ってきました。

平成 11 年 7 月に、農林水産省の「日本の棚田百選」に認定され（写真 1）、これを契機に、地区では耕作放棄もやむを得ないと諦めかけていた棚田の保全に向けた機運が高まり、その手法について話し合いが始まりました。

話し合いでは地区が有する自然の美しさ、新鮮で多様な農産物、豊富な山の幸を地域資源に位置付け、これらを有効活用した都市住民との交流により、棚田を守り地区の活性化を図っていく方向性が確認され、その実行組織として棚田所有者など地区農家7戸から成る「大張沢尻棚田保全委員会」が平成12年4月に結成されました。



写真1 大張沢尻の棚田が「日本の棚田百選」に

保全委員会では、都市住民との交流による棚田の保全と地区の活性化に向けた具体的な取組として「棚田保全援助隊」と銘打つ農業体験ツアーを実施しました。この体験ツアーをはじめ、様々な農作物による加工品づくり体験の他、地元食材を用いた昼食の提供や新鮮な農産物の直売を通じて都市住民との交流を深め、棚田ファン、丸森ファンの獲得に努めるというものでありました。

しかし、平成23年3月の東日本大震災により発生した原発事故の影響や、少子高齢化による人手不足から、平成24年に保全委員会は解散。解散後の1年は保全委員会を結成した主要メンバーのご子息等によってなんとか耕作が行われましたが、それ以降の耕作等是不透明で棚田の存続も危ぶまれた時期がありました。

現在、ひとまずその不安は解消され、中山間地域等直接支払交付金を活用し、集落協定による保全活動が行われています。集落協定の代表にお話を伺ったところ、「棚田百選に認定されて以降、町外や県外から訪れる方がいるため、来てもらう方のためにも、きれいな棚田を見てもらうように出来る範囲で活動を続けていきたい。これまでは体験ツアーなども行われてきたが、そこまでの余裕がなく、耕作し畦畔の除草などの維持管理で精一杯だ。大変だけれども残さなくてはならない物と思い棚田での耕作を引き受けた」と話す。

そのような状況の中、棚田で収穫された米を『棚田米』として、住民が主体となって運営しているお店『大張物産センターなんでもや』で販売している。

この店は、地区からお店が消えた時に、地区のほぼ全世帯の共同出資により平成15年12月に開店した。小売店の枠を越え、地域のコミュニケーションツールの拠点としても機能しているところである。

中山間地域等直接支払交付金制度もいつまで続くかわからない。現在携わっている方々も何年か後には体力的に限界がくる。

先人から継承されてきた『大張沢尻棚田』(写真2)を地域の宝として後世に継承していけるよう、地域の方々と話し合いを重ねながら模索していきたい。



写真2 大張沢尻棚田

## 事務局ニュース

### ◎棚田学会創立20周年記念大会開催のお知らせ

- ・日程 2019年8月3日(土)
- ・会場 東京大学山上会館(本郷キャンパス)

### ◎棚田学会現地見学会

- ・日程 2019年6月29日(土)～30日(日)
- ・場所 稲倉の棚田(長野県上田市)他

### ◎平成30年度石井進記念棚田学会賞候補者募集

自薦他薦を問いません。詳しくは同封の「棚田学会賞公募案内」をご覧ください。

※なお、行事の詳細は改めてご連絡いたします。

### 【編集後記】

若い人にもっと棚田に興味をもってもらいたい。そういう思いから組んだテーマがこの「棚田と教育」。棚田地域は勿論、都会の学校でも棚田の学習は可能であることを広く知ってもらいたい。(秋本洋子)

棚田学会通信 第57号 2019年1月30日発行

発行/棚田学会

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1

早稲田大学教育・総合科学学術院 高木徳郎研究室内

TEL: 03-5286-1572 FAX: 042-385-1180

E-mail: tanadagakkai@gmail.com